

狙われた移民第2世代—欧州の「聖戦士(ジハーディスト)」—

平野 雄吾

(共同通信カイロ支局特派員)

かつて、欧州を形成する文化的要素として次の三つが語られたことがある。ギリシャ・ローマの古典古代の伝統、キリスト教、ゲルマン民族の精神—。だが、欧州を語るときのキーワードは変わった。アラブ系移民・難民、イスラム教、そしてテロだ。15年11月のパリ同時多発テロ、16年3月のベルギー同時テロ…。一連のテロ容疑者の多くは、イスラム系移民家庭出身で、欧州で育った。一部はイラクやシリアの過激派組織「イスラム国」(IS)に参加、難民に紛れて欧州に戻った。「自国育ち(ホームグロウン)」のテロリストの脅威。犯罪と貧困、失業に表象される移民街がクローズアップされ、社会統合、過激派対策が欧州であらためて叫ばれている。問題は欧州の外にはなく、内側にある。だが、その内側の闇をうまく利用し、「聖戦士(ジハーディスト)」に仕立て上げ、戦闘員やテロリストにしたのが中東のイスラム過激派だった。

パリ同時多発テロとベルギー同時テロ後、現場で取材し多くの移民街を歩いた。パリ郊外では、白昼堂々と覚醒剤取引が行われるのを目撃し、ブリュッセルでは、私自身が強盗被害にあった。パリでもブリュッセルでも、地元行政関係者は同じ言葉を口にした。「移民たちは、この国に来ると物価の安いこの地域に住み始め、お金がたまるとうちを出て行ってしまふ。その代わりにまた貧しい移民が新しく来る。結果、この街はいつまでたっても貧しく、犯罪はなくなる」。移民に同化を迫るフランスも、異文化に比較的寛容なベルギーも、どちらも同じ現実を抱えるところに問題の根深さがある。

ベルギー同時テロから10日後の4月1日、ブリュッセル中心部のカフェ。長男アリ(仮名、28)がISに参加したというモロッコ系ベルギー人サイーダ(53)が重い口を開いた。「息子がインターネットで血だらけになったシリアの子どもたちの写真を見せてくれたことがある。『この子たちはみんなイスラム教徒なんだ。助けてあげないとだめなんだ』。息子は敬虔なイスラム教徒ではなかった。だからとても驚き、覚えている」。アリは妻(23)と長男(9カ月)とともに2014年10月、トルコ経由でシリアへ行き、15年12月、ISが支配するイラク北部モスルで死んだ。妻がその死を知らせてきたという。

6歳で両親とモロッコからベルギーへ移住、離婚し、清掃員として働きながら、女手一つでアリら5人の子どもを育てたサイーダ。今も喪失感の中で疑問を抱え続けている。アリは高校を中退、就職と失業を繰り返しながらようやくレストランに仕事を見つけ、家庭も持った。「なのにどうして—?」

若者たちが過激化するのとはなぜか。フランスイスラム団体連合(UOIF)の事務局長レクビル・コトビは、過激化するイスラム教徒の多くの共通点として、①モスクに通わない、②家庭に問題がある、③学業を中断している一点を挙げた。「彼らにあるのは憎しみではなく、社会から拒絶されているという疎外感だ」と強調する。さらに、ブリュッセルの移民街モレンバークで移民の子どもたちを支援するルーバン・カトリック大名誉教授ヨハン・ルマンは「元々の犯罪者ネットワークが過激派ネットワーク、テロリストネットワークと結びついた点に現代の特徴がある。非行グループがそのまま過激派になるケースが多い」と指摘した。

実際、パリ同時多発テロの首謀者とされる容疑者アブデルハミド・アバウド(フランス当局の制圧作戦で死亡)や、同テロで唯一生き残った容疑者サラ・アブデスラムはともに 2010 年ごろ、軽犯罪で服役している。そのほか、多くのテロ容疑者に麻薬取引や強盗をはじめ犯罪歴がある。ルマンはさらに、「ベルギーには武器の闇取引市場もある。このネットワークも過激派と結びついた」と付け加え、パリ同時多発テロで小銃が乱射された背景を説明した。もちろん、純粋な理想主義者が過激派の勧誘に引き込まれるケースもある。

根底にあるのは疎外感や社会への不満だ。心通わせる仲間を求める若者たち。こうした移民系の若者をターゲットに「聖戦(ジハード)」を呼び掛けたところに、ISの宣伝の巧みさ、戦略の新しさがある。オランダに拠点を置くテロ対策国際センターによると、11年1月～15年10月に欧州からシリアやイラクに渡航した戦闘員は4千人。うち約3割が帰還したとみられている。

2001～02年、大学生のときにパリに留学した。当時から郊外の移民街は、犯罪と貧困、失業の象徴だった。米中枢同時テロの直後で、テロと言えばアルカイダ。「郊外のモスクで移民系の若者たちが過激派に勧誘されている」。そんな指摘はあのことからあった。

15年がたち、事態はより複雑化し、深刻化した。郊外を歩いていて、やたらと目についたのがアラブ系政治家のポスター。テレビをつけても多くの黒人やアラブ系のキャスターがニュースを読み上げている。15年前には、ほぼ見られなかったことだ。フランス人記者たちと意見交換を繰り返したが、彼らの多くも移民2世、3世。移民家庭出身者がしっかりと社会に溶け込んでいる。そんな印象を抱いた。もちろん、就職差別の実態を熱く語る移民にも出会った。だが、議員や医師、弁護士など社会的地位の高い職種に就き、活躍する移民2世、3世が着実に増えている。犯罪と貧困、失業という移民像や、白人フランス人と移民系フランス人との対立という枠組みだけではもはや社会を語れない複雑さがここにはある。哲学者マルセル・ゴーシェは「(単純労働が中心だった時代から)経済構造が変化し、情報化社会で就職に高度な能力が必要になった」と指摘する。移民系の若者の中でも、社会に溶けこめる層と溶けこめない層との二極化が進みつつある。(敬称略)